

# ハイスクールD×D～赤 龍帝の幼馴染は転生者 ～

ジント

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

にじファンで連載していたものの修正版です。

ハイスクールD×Dの世界に転生した天才少年薊屋狼土。何故自分がこの世界に転生したのかは分からない。ならば、自分らしく今を楽しんで生きる。そう誓った少年が関わる事で物語はどのように進むのか、それはまだ誰も分からない。

※シリアスっぽいですが原作のように笑って楽しめる作品です。

# 目次

プロローグ

1

第一話

7



# プロローグ

過去に戻りたいと思った事はあるだろうか？

過去に戻って間違いを正したい、宝くじで一発当てたい、あの時何があったか知りた  
い、と、考えられる理由は様々だ。

もし本当に過去に戻ったとして、見るだけなら何も問題は無いだろう。

でも過去を変えたいという事はそれまでの人生を消し去る事に他ならない。

間違いを正せば間違いを起こした己が消える。

宝くじで一発当てれば宝くじを買わなかった、あるいは外れた自分が消え去る。

というか、連鎖反応やバタフライ・エフェクトとかいうやつで自分以外の存在にも影  
響を与えるだろう。

まあ、肯定するつもりはないが別に否定するつもりにはならない。

何が起こるか理解した上で目的を成すために過去に行く。

そんな覚悟を決めた人間を止められるわけがないし、何を言っても無駄だ。

自分に悪影響が出るなら全力で阻止するが。

だがしかし、何の目的も無いいきなり、いつのまにか、一瞬で、過去に戻ったとした

らどうだろうか？

見知った顔があつて何故か体が縮んでいたらどうすればいいのだろうか？

つまり、何が言いたいかと言えば――。

「あなた、狼土が起きてるわ」

「ああ。でも泣かないなんて根性のある子だなあ」

「もう！ 赤ん坊に根性なんてある訳ないでしょう！」

――何故か赤ん坊に頃に戻っていました。

あざみやろうど  
薊屋狼土、それが俺の名前だ。

記憶が正しければとある有名な私立高校に通う高校三年生で家族構成は俺と両親を合わせた三人家族。

両親は高名な考古学者であり世界中を飛び回っているため実質一人暮らしな生活を満喫中。

遺伝なのか子供のころから大抵のことは何でも出来た。

そのため小学校の頃は神童と呼ばれていたが、中学に上がってからは思春期だったのか中二病をこじらせたのかいわゆる不良と呼ばれる存在になり様々な悪事に手を染

めた。

高校に上がってからでも因縁を吹っかけられることが多々あり、そのせいで友達の数是一片手で数えられる程度で、何故か舎弟は百人近くいた。

ついでに言えば容姿も整っている。

客観的に見てイケメンの部類に入るだろう。

不良でイケメンで天才。

まるで漫画や小説から飛び出してきた現実にいるはずが無いような男。

それが俺だ。

自分でも変だと思う事は何度もあったが、現実は小説よりも奇なりと言うし一応気にしないでいた。

だが――。

「……ホント、これは予想外だったよなあ」

夏真っ盛り。

外は炎天下の中、家の中でクーラーの冷風を浴びながら俺は午後の昼寝を堪能していた。

タイムスリップ、いや、異世界に転生して早八年が経過した。

記憶よりも若い両親を見たときは過去に戻ったのばかり思っていたが、住んでいる場

所が違ったり俺の知っている歴史とは異なる所が幾つもあった。

この事から俺は自分が過去に戻ったのではなく並行世界、いわゆるパラレルワールドに来たのだと考えた。

もちろん、最初はかなり混乱した。

何故か生まれ直す直前の記憶はかなりあやふやで、しかも体の自由がきかない赤ん坊なので当然と言えば当然なのだ。

そのまま赤ん坊プレイを無我の境地で乗り切り、小学校に上がるまで情報収集。

小学二年生の現在はようやく慣れてきたこの生活を楽しんでいる。

単純に過去に戻っただけなら、かつて経験した事をするだけの生活に対し飽きを覚えながら惰性で生きるしかなかっただろう。目的の無いタイムスリップほどつまらないものは無い。

だが幸いな事に、この世界は俺が知っているのとは違うし、なによりここには親友がいる。

ピンポーン。

『ロウ、いるんだろ一緒に遊びに行こうぜ！』

インターフォンから無駄に元気な声が聞こえた。



親友の声だ。

俺は起き上がり玄関まで行くと勢いよくと扉を開く。

「このクソ暑い中よく外で遊べるなイツセー」

「いいだろ別に。それより面白いの見せてやるからついてこいよ！」

目の前の少年——この世界に転生してから出来た幼馴染にして親友、兵藤一誠は妙な笑顔でそう言うのだった。



この時の俺はまだ知らなかった。

この世界の真実。知られざる所で存在する者たち。

そして——俺とイツセーに眠る力の事を。

天使、堕天使、悪魔、神々、そして神セリクツキトキア器。

この事を知るのは七年後の夏。

中学三年生の一学期が終わった次の週だった。

ハイスクールD×D〜赤龍帝の幼馴染は転生者〜

プロローグ

『はじまりのはじまり』

## 第一話

Auf Wiedersehen. これ喰らつて、地獄に逝けや。

『オキナサイ! オキナサイ! オ、オキナイナラ、キ、キス、スルワヨ……』

「……んあ」

ツンデレ声の目覚ましによつて床で寝ていた俺は目を覚ました。  
本来はこの部屋の主を寝床から起こすのが役割なのだが、その主はベッドの上でいびきをかきながら寝続けている。

俺はおぼつかない足取りで部屋の主——イツセイの前まで来ると、  
「いつまで寝てんだ。とつとと起きろ!」

あらかじめ用意してあつたハリセンを顔面目がけて振り下ろす!

パアアアアアン!

「痛つでええええええええええ!」

派手な音と共に、鼻っ柱を抑えながらイツセーはベッドから転がり落ちる。

「さあ、飯食つたら今日の分の勉強を始めるぞ。休む暇もないと思え」

中三の夏休みの初日の朝、床で悶絶するイツセーに向けて俺はそう告げた。



何故俺がイツセーの部屋で寝ていたか？

別にBでLな腐った女子が好むような理由ではない。

始まりは昨日の終業式が終わった後、

『ロウ、お願いだ俺に勉強を教えてくれ！』

『何処で頭打ったイツセー!? お前が勉強? 冗談だろ!』

『冗談じゃない! とりあえずこれを見ろ』

『えつと、私立駒王学園入学案内……って駒王学園!? この辺りじゃ一番の難関校だぞ? お前の頭じゃたとえ天地がひっくり返ってもありえねえよ!』

『確かお前の志望校もそこだったよな? ならついでに色々頼む!』

『そもそも何でここに入りたい? ちゃんと理由を説明しろ』

『女子が多い! 女子高生に囲まれて授業を受けたい! この学校でハーレムを作る』

！』

『このスケベが！』

『スケベで何が悪い！　いいか、俺にはもう入学早々彼女をゲットしてそのあと別れと出会いを繰り返して卒業の時に複数の女子が俺を取り合つてバトルロワイヤルをするという壮大な計画が立てられているんだ！　入試なんて最初の部分で躓くわけにはいかないんだよおおお！』

『そんな不純かつ小数点以下の可能性のために貴重な夏休みの時間を削れと？』

『頼む！　お願いします！　何でもするから！』

『・・・ほお、言つたな』

『えっ』

『しようがねえ奴だ。今日からみっちり勉強をおしえてやる。ただし、途中で逃げるのは絶対に許さないからな。夏休みが終わる頃には、趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎、好きな言葉は晴耕雨読』といつた優等生に生まれ変わらせてやる』

『ちよつと待つたあああああああああああああッ！　何ソレ？　もはや別人になつちやつてるよ俺？　そこまでしなくてもいいから普通に勉強を教えてくださいだけでも・・・』

『何でもするつて言つたら。それに学問に王道は無い！　さつそくお前ん家に泊まり込

みで勉強会だ。おばさんもおじさんも快諾してくれそうだし何も問題はないな』  
『うわあああああッ！ 誰か、誰か助けてええええ！』

———という事があったからだ。

そんな訳で現在。

「相変わらずおいしいっすねおばさん」

俺は兵藤家のリビングにて朝食をごちそうになっていた。

久々におばさんの味噌汁を飲んだが、相変わらずおいしい。

ちなみにここにいるのは俺、イツセー、おじさん、おばさんの計四人だ。

二人には昨日事情を話したのだが予想通り快諾してくれた上に食事まで作ってくれる事になった。

適当にコンビニ弁当で済ませようと思っていたからありがたい。

「あら、おだてても何も出ないわよロウ君」

「お世辞じゃないですよ。それにしてもわざわざ俺の分まで作ってくれるなんてすみません」

「別にいいのよ。昔は家事が出来るようになるまで一緒に食べてたし、イツセーの勉強

も見てくれているしね」

俺の両親は仕事柄ほとんど家にいない。

前世でもそうだったので特に気にはならなかったが、自炊が可能な年齢になるまではこの家にお世話になっていた。

本当に俺つて世話になりっぱなしだな。

「それにしてもイツセーが駒王学園にか・・・正直どうなんだい？」

「それは——」

おじさんに聞かれちらりと横を見る。

そこには死んだ魚の如き目をしたイツセーが黙々と飯を食っていた。

ふむ、アレが予想以上に聞いたらしい。

試しにイツセーの目の前にエロ本を置いてみる。

だがしかし、小学校の頃から性欲の権化とまで言われたイツセーが何の反応も示さない。

「だ、大丈夫なのかい？ イツセーがエロ本を前に何も言わないなんて・・・」

心配そうな顔でおじさんとおばさんが俺を見てくる。

「問題ないですよ。これを使っただけですから」

と、俺は《サルでも分かる催眠術》と書かれた本を取り出した。

「さつきこいつに催眠術使ったら面白いくらい効いたんです。

今なら勉強した事が簡単に頭に入る筈だから基本的な事は全部この夏休み中に覚えさせられます」

俺がそう言うのと二人は安心したような表情を浮かべる。

「そうか。それなら安心だね」

「そうね。今まで勉強しなかったツケが来ただけだし、しっかりとお願いね」

それを聞いて少々顔が引きつるのと同時に何だか申し訳ない感じになってしまった。

「……すみません。あの時、俺がイツセーを説得できていれば」

「いや、あれは君のせいじゃないよ。バカな夢を見たイツセーが悪い」

「そうよ。『不良になったらモテる』なんて幻想抱いて、結局彼女を作るところか口クでもない噂が広まって敬遠されたのは自業自得よ」

そう、今から二年くらい前の話だ。

当時から俺とイツセーは不良として名を馳せた。

俺にとって中学校の勉強など退屈なものではなく、故に前世と同じように授業をサボり、色々な事に首を突っ込んでいくうちに俺は再び不良と呼ばれるようになった。

ここまではいい。

だが誤算だったのはイツセーまで俺と一緒に不良になった事だ。



理由は実にこいつらしく『不良になったらモテる』との事だった。

なんでもイツセーによると俺は学校の女子の間ではかなり人気があるらしく、それならば自分も不良になればモテるんじゃないか？ という考えに至った訳だ。

もちろん俺は説得した。

俺が不良をやっているのは学校の勉強が退屈だからでモテるのはイケメンだからだと何度も言ったのだが、それを聞かされた時にイツセーは俺も不良になると言っていて聞かなかった。

最終的に俺が根負けし、一緒に学校をサボって喧嘩にイタズラ、覗きにギャンブル、他にも無免許運転やら様々な事をやらかした。

正直、一人でやるよりもイツセーと一緒にいざやぐのは楽しかった。

だが、ある日悪友の元浜と松田からもたらされた噂話によってイツセーは不良をやめる事となる。

その噂話とは、美少女を見たら襲いかかる野獣イツセー。カップルを見かければ男を半殺しにして女の子を連れ去り、人目につかない所で鬼畜三昧のエロプレイを強制し、『くつくつく、見ず知らずの、それも彼氏をボコった男の前で卑しい顔しやがってこのメス○○がッ!!』と罵っては乱行につぐ乱行をし、さらにはボコった男の方もあとでおいしく頂く、というものだった。

それを聞いた時のイツセーの顔は忘れられない。

ついでにイツセーを見る女子の目も忘れられない。

あれはあきらかに汚物を見る目だった。

そして俺も俺でイツセーとそういう関係であるという噂が流れつつあり、急いで事態の究明を図った。

あらゆる伝手をを頼り、その噂を流したのは以前俺達にボコられた不良グループの奴らだと分かった時、俺とイツセーは連中相手に口に出すのも憚られるようなお仕置きを行い、その後、真つ当な学生として生きる事にしたのだ。

・・・と言つても、未だに喧嘩を吹っかけられることがあるが。

考えてみれば俺って前世から全然成長してないんじゃないだろうか？

いやしかし、精神は肉体に引つ張られるとも言うしおかしくはないのかもしれない。

「あの時の写真はたくさん撮つてあるのよねえ。特に中二の時なんてたくさんあるのよ。もしイツセーに女の子の友達がたくさん出来て家に来たら、是非ともアルバムを見せたいわあ」

「・・・黒歴史を見せるとかどんな罰ゲーム？」

中二の頃のイツセーはまさしく中二病を発症していた。

無駄にカッコつけた言動、自作の詩、髪を染める、バイクを乗り回す。

まさしく黒歴史。

当時の事には触れないのが俺達の暗黙の了解になってるくらいだ。

……まあ、女の子の友達が出来るなんてこいつにとつては儂い夢でしかないだろうが。

「まあ、よろしく頼むよロウ君。エッチなだけで悪い子じゃないんだから」

「それは分かってますって。……ご馳走様でした。ほらイツセー、さつさと片付けて勉強するぞ」

とりあえず今日は文系科目を……ざつと十二時間くらいやらせるか。

のろのろと動き出すイツセーを尻目に、俺は今後のプランを練るのだった。

—●●—  
く五日後く

「さてさて、ブツも手に入ったしさつきと帰ろうかね」

イツセーに勉強を教え始めてから早五日が経過し、俺は自宅から二駅ほど離れたところにある本屋へと寄っていた。

この五日間でのイツセーへの勉強は予想以上の効果を上げている。

元々エロい事しか頭にないのでまるでスポンジのように頭に入って行くのだろう。

まあ、たまに「お……ぱい……おん……のこ」とかブツブツ言っているが気にしない。

放っておくと何も食べずに勉強し続けるのも気にしない。

あいつの頑丈さは良く知っているのでこの程度ならまだ大丈夫だ。

この調子でいけば夏休みが終わる頃には大幅な学力の向上を期待できる。

そんなわけで少しはご褒美を上げても問題ないだろうと思い、馴染みの少々胡散臭い本屋へ足を向けたのだ。

少々値段は高かったが、まだ十八歳未満の俺たちは普通の店では買えないためこういった怪しい店で買わなくてはならない。

それでも置いてある本はそれほど凄い物でもないし、当然エロDVDなんてものは売ってない。

松田や元浜はどうやってあれほどのエロ本やエロDVDを揃えてるんだ？

あいつらが独自のルートだから教えられないと言った時の顔を思い出したら殴りたくなってきた

そこから数冊のエロ本が入った袋を持ったまま、俺は人気が無い方に進んでいく。

途中で誰も使っていないようなコインロッカーが並ぶ通路を抜けて入り組んだ道を

通り、やがて少し広い空地へとたどり着いた。

そして――。

「で、さつきから何だよあんた？」

さつきから後ろにいる尾行者へと声をかける。

気づいたのは本屋を出た辺りから。

妙に粘っこい視線を向けて来るので振り切ろうとしたのだが振り切れなかった。

この感じからして普段から突つかかってくるチンピラではなく本職の奴であるのは間違いない。

しかし、俺は恨みは結構買っているが、ここまでやばそうな連中との縁は……あんまりないんだがな。

とりあえずあれこれ考えてもどうしようもないのと、相手はおそらく一人である事からこうして誰も寄り付かない場所へと誘導したのだ。

俺が声を上げてから少しして、路地から黒いスーツを着た男が出て来る。

黒髪に掘りの深い顔立ち。体格は中肉中背の一見すると何処にでもいるサラリーマン。

だが、俺には分かる、いや、分かってしまった。

こいつはやばい！

俺は前世も含めて今までかなりの修羅場を潜り抜けてきた。

それでも、これほどのプレッシャーは感じた事は今までで一度も無い。

あきらかに人間が出せるようなものじゃないぞ。

……いや、そもそもこいつは人間なのか？

「……あまり手荒な真似をしたくない。少年、大人しく私のいう事を聞いてくれないかな」

男は口を開いたと思ったたら何やらふざけた事を言ってきた。

「もし、断ったら？」

出来る限り表情を崩さず軽い感じで聞き返す。

もちろん油断などしてはいない。

相手の一挙一動を見逃さず徹底的に観察し続ける。

「最悪、君を死体にして連れて行く」

……死体ときたか。

出来れば冗談とかで済まして欲しいが、相手の目を見る限り本気らしい。

……仕方がない。どうも腹をくくる必要があるそうだ。

命がけの戦いなどあまりしたくは無いのだが、そうも言つてられない状況だしな。「あくそりや勘弁してもらいたいなあ」

頭を掻きながら丁度左半身が相手の方を向くように方向転換する。

そして、

「——てなわけで死ね」

直後に轟音。

発生源はオレの左手、正確にはそこに握られたデザートイグル自動拳銃からだ。

不良をやっているうちに出来た人脈を頼つて手に入れた代物で、普段は先程の通路のコインロッカーの中に隠してあるのだが一応持つてきておいて正解だったか。

装填してあるのは非致死性のゴムスタン弾だが、この至近距離ではヘビー級ボクサーのパンチ並みの威力がある。

下手をすれば内臓破裂もあり得るそれを眉間、喉、鳩尾、股間と言つた正中線上に四連射。

先制攻撃としては少々過激なものだ。

だが、並みの人間なら病院行き確定なそれを、

「……マジ?」

あろうことか男は少しよろめく程度で耐えきった。

「最近の若者はそんなものまで持ち歩いているのか。正直驚いたな」

「俺はあんたのその頑丈さにビックリだよ。ひよつとして強化人間とか改造人間とかそんなやつ?」

「前提からして違う。私は人間ではなく——」

俺の問いに対し男はにやりと笑い、

——  
バサッ!

背中から一対の黒い翼が現れた。

「いわゆる墮天使と叫ぶやつさ」



これが俺の墮天使とのファーストコンタクト。

そしてこの日を持って俺は世界の裏側へと足を踏み入れた。